第八章　九月八日　貴衆両院からの協力と在日外国人への支援

震災第四日内務大臣後藤新平から救援政策参与の依嘱を承けた渋沢栄一は、以後連日にわたり協調会館や商業会議所で対応策を協議したが、九月八日貴族院議長徳川家達および衆議院議長粕谷義三から連携の提言がなされ、救済機構の大同団結、大震災善後会の結成へと進捗する。本稿の主要な史料、渋沢栄一「大震災の追想と所感」と部分的に重複するが、十一月四日龍門社例会でなされた彼の演説にはその経緯がやや詳しい。

善後会結成の経緯（渋沢栄一）

三日の日に新内閣が出来ますと、早速内務大臣から、相談したい事があるから出て呉れろといふことで、救護事務局へ呼び出されまして、ここにに初めて、いろいろ震災その他の事に就ての状況も聞き、尚ほどうもこの場合は、お前等に力を入れて貰ひたいと思ふ、殊に協調会の働きに就ては、渋沢を労するが宜いと思つて御相談をする次第である、といふやうな話でありました。私も至極然るべき事と思ひましたから微力何等の効能もなしますまいけれども、併し一生懸命はたらきませうと申して、協調会の活動に就て大いに努力を致した訳であります。その協調会の働きはまア第一には炊出しをやるとか、或は情報の案内をするとか、

若くは病院をつくるとか、避病院を建てるとか、さういふやうな事で今なほ汲々として努めて居ります。

続いて、これはどうしても政府の救護事務局ばかりではいくまいから、仮令さまで完全なものは出来ないでも、一つ民間の施設が必要であらうといふ考から、その翌日即ち五日の日に、商業会議所の会頭と相談をして、市内の実業界の有力な方々丁度四十五・六人のお人にお集りを願つて、どうしてもこれは只置けないことであらうから、民設なる救護班若くは経済に対する恢復をはかる、一時のものであるにしても団体を作つたら宜からう、名は何とするか、方法は如何にするか打寄つた人々の御評議に依つて、委員でも作つて委せるやうにしたいといふ考でお集りを願つた折柄に、丁度その翌々日でありましたか、八日の日に徳川・粕谷両君が、自分達もさういふ企てを持つて居るから、是非共にやることにして貰ひたいものだ、実業界の諸君に異議が無いならば、といふ御相談でありました、勿論左様なものを二つも三つも立てるよりは、むしろ協同した方が宜からうと思ひましたから自分は略々御同意をして、九日の日の寄合に、大体に於ては実業家側の組織如何といふことを御相談し、第二に今の貴衆両院の議長からの御注文であるが、共にやるといふ事はどうであるかといふ事を御相談しましたところが、全然どちらも同意であつて、即ち今日の大震災善後会といふものが成立しました。その大震災善後会に就ては、御列席の皆様中にも大分御参加下さつて居るお方もある訳であります。①

① 「青淵先生演説速記集（三）」『渋沢栄一伝記資料』第四三巻、一六一頁。

のちに侍従として昭和天皇に仕える河井弥八は、関東大震災のとき貴族院書記官長の職務にあった。九月四日彼は衆議院書記官長中村藤兵衛とともに本所・深川方面の状況を視察する。惨憺たる被災に動転しつつ、ふたりはそれを貴族院議長徳川家達と衆議院議長粕谷義三に奉告し、政府による救済に民間の勢力を加える必要を進言する。実業界の有力者に依頼すべく東京商業会議所への会見を予定したが、それに先立って青淵なる号、渋沢栄一の自邸をまず訪ねた。以下は実に三四年後、昭和三二年に雑誌『青淵』へ寄せられた河井の回想である。

大震災の罹災救護事業（河井弥八）

自分は青淵先生には直接お近附きになつていなかつた。関係する方面が違つていたからである。唯、当時自分は貴族院書記官長であつて議長徳川家達公の下で勤めていたので、青淵先生が慶喜公の家を再興なさつたことなど、徳川家のため、種々骨を折られた事はよく存じていた。

そういう関係の乏しかつた自分が青淵先生と接したのは関東大震災の折のことであつた。大震災が起つたのは大正十二年九月一日であるが、その四日と思うが、自分は衆議院書記官長中村藤兵衛君とともに市内の災害地をひとわたり、破壊された街路を通つて、自動車で行ける所は自動車で、車で行き難い所は徒歩で廻つた。到る処惨澹たる状況で、本所の被服廠跡を初めとしてまだ惨死者がそのままであり、負傷者も飢餓の者も何等救護の手が施されていなかつた。

そこで自分等両人は、これは直ちに救済の方法を講じなければならないと考えた。事務局に帰るとすぐ、議長徳川公を千駄ケ谷の邸に訪うてこうお話した。当時徳川公は日本赤十字社長も兼ねておられたので、「赤

十字として直ちに罹災者の救護に当つて頂きたい。その惨状は一時も猶予ならないものであるから即時に、医師と看護婦と医療品を備えて多数のトラックを出動させて頂きたい。それと同時に、議会と財界の首脳者と一緒になつて、臨時応急の対策を実施するようにして下さるよう」お願いした。そこで公のお指図の下に自分はまず、青淵先生に御相談することとして王子の邸へお伺いした。

王子の御邸には既に先客があつた。それはクリスチヤンの人と、もう一人は寛永寺のお坊さんであつた。ソコデ自分は先生にお目にかかるとすぐ、徳川公のお使いで伺つたと告げ、自分は今日罹災地を一巡して直接見たところを述べ、直ちに救済と復興とに着手したい、それには議会と財界と一緒にやつて頂きたいと思うので、先生には財界の中心として是非立ち上つて頂きたいとお願いしたところ、先生には直ちに力強き同意を与えられた。①

かくして帝国議会と実業家団体の提携も進み、大震災善後会が結成されるが、この回顧でとくに想起されるのは、在日欧米人への救済である。善後会による欧米人用学校建設について、やや先走るが河井の回想をさらに続ける。

① 河井弥八「大震災当時の罹災外人救護事業」『青淵』第九六号（昭和三二年三月）、二八―二九頁。『渋沢栄一伝記資料』第四十巻、三〇四―三〇五頁。

この時のことであるが、救済部の義金は日本人救済のみに用いては不可というので、京浜間の外人でひどい目に遭つた人達をも何とか救護しなければならないということになつて、別に委員を作つて事に当つた。その委員は次の人達であつた。

日本側＝渋沢栄一　黒田清輝　藤沢利喜太郎　阪井徳太郎　河井弥八

外人側＝ブレーキ・ブルター　バートン・フレザー　メーソン・メージヤー・サムソム

最初の計画は、京浜在住罹災欧米人百五十人を救済することとしてバラツクを建てる事であつた。これがため建物の敷地として、日本赤十字病院の向側の羽沢所在の御料地を三カ年無代で拝借することとし善後会から金六万五千円。徳川公が会長であつた震災同情会から金壱万五千円。他に、震災救護事務局から木材一、八九三石・毛布・寝具食器等見積額二万円。合計拾万円の金品で救護に当つたのであるが、羽沢の御料地には既に、無許可で住んでいる者があつて中々立退かない。そうこうしている中に外人側から、仮宅建築は中止して学校を建てたいという申出が出て来て、その方に変更することとなつた。

この時出来たのが今もある目黒のアメリカン・スクールである。十二カ国、百三十余名の学生を収容する予定で、二階建八教室、他に寄宿舎（定員二〇―二五名）、集会堂（定員三〇〇名）、附属建物（食堂厨房・便所等）というものであつた。これは十三年九月に出来上つた

大震災の折はアメリカを初めとして外国からの救援が非常に多く寄せられた。フリーメーソンからも金が来ている。そういう際であつたから、この京浜間の欧米人救済は余り人には知られていないが意義深いものがあつたのである。

青淵先生はアメリカの財界人に非常に良かつた方であつたから、善後会にも大変功績があつた事になろう。

又丁度この震災の起る前、同年四月頃からであつたが、東京パン・パシフイツク・クラブという会が出来た。毎週金曜日の昼食会で、貴族院議員井上匡四郎子爵を会長とし、会場は帝国ホテルを用いていたが、この会は実に六百回以上続いて今度の大戦の前迄開いていた。この会に青淵先生に来て頂いた事もあつた。震災の折の京浜間外人救護にはこのクラブが大に役立つているであろう。①

河井の回顧で伝えられる京浜外国人への資金提供については震災の翌年七月二四日付『時事新報』において関係者の談話とともに委細が報道される。なお、貴族院議員として善後会役員に選ばれ、アメリカン・スクール建設をも推進した洋画家黒田清輝は、この記事が読まれる十日前に絶筆「梅林」を遺して病死した。

ホテル泊りは困難な外人独身者の大寄宿舎（『時事新報』）

◇内外のお歴々が奔走して資金十万円で渋谷に建つ

昨年の大震災以来京浜在住の各国外人中で、資力のあまり豊でない人即ち学校教員とか会社のタイピストと云ふ様な人々は、俄に住居を失つて非常に困つてゐる。と云つてホテルへ行けばなかなか高くてとても月給全部を投げ出しても足りないと云ふ始末、そこでこれが救済として何処かへ寄宿舎の様なものを作つたならと、米国事情に最も精通してゐる三井の理事阪井徳太郎氏、英国通の藤沢利喜太郎博士、仏国通の故黒田

① 同書。三〇五頁。

清輝子、汎太平洋会で外人の多くを友人に持つ河井貴族院書記官長等は、渋沢子爵を委員長に仰ぎ極力奔走の結果、内務省救済善後会より六万五千円、徳川公等を中心として貴族のみで組織されてゐる同情会から一万五千円、外に米材約二千石（価格約一万五千円）及び寝台・毛布・暖炉・卓子・椅子・シーツ等の家具約五千円　総合計十万円を得たので、此程前記諸氏は英・米・仏其他の外人と協議の結果、渋谷の赤十字病院前にある旧感化院跡敷地三千坪を、宮内省より無代価で七月一日より向ふ三ケ年借用し、大規模の外人寄宿舎を建て、前記の人人を救ふ外に、在留外人の子弟の多く通学するアメリカ学校（地震で大破損したので目下芝浦埋立地にバラツク校舎で一時間に合せてゐる）をも右敷地内に建て、又之等寄宿舎生活者の慰安を目的とする集会所も二・三百坪の大きさで作り、演説会場や活動上映舞踏用等に供する仕組である。因にアメリカ学校の生徒は十ケ国程の外人の子弟を含み、外国生れの日本人の子供ともその生徒数は目下百四・五十名であるアメリカン・スクールを第一に建てる。

◇総て外人委員に任せて　阪井徳太郎氏語る

右に付き阪井徳太郎氏は語る「此企ては昨年の十月に吾々が、思ひ付いたのですが、当時感化院跡の敷地の中に一・二の人が住んで居て、その人々が立退きを延引したので、遅れ遅れて遂に今日になつたのです。外国人の委員としては米国側セール・フレーザー氏、ブレーキ氏メーガー氏、バートン氏、エリオツト氏の五人、英国側英国領事ボルタ氏、大使館書記官のサムソン氏、高田商会のメーソン氏、英国電気スウヰフト氏、及びストラツサー氏の五人です。遅くも九月までには実現が出来ると思ひますが、一番急を要するのは外人子弟の教育に関係あるアメリカン・スクールで、これを先づ第一に建てる考です、寄宿者は独身者を原則とします。いよいよ出来上つた上は一切の権能を前記の外人委員に任せ、宿泊申込人に就ては責任を以て

選択することにしたらと思ひます。」

◇申込は既に五十名　英大使館のサ氏語る

英大使館のサムソン氏は語る。「誠に結構な企てで、吾々外人は非常な満足を持つて感謝してゐる次第です。唯今のところ申込者は既に五十名程ですが、愈々出来上つた暁には沢山の申込み者があると思ひます。規則には別に露国人は入れぬとか独逸人は拒否するとか云ふことはありませんが、之れ等の人々を入れる場合は充分素質を調べてからにしたいと思ひます。私はアジア協会の会員ですが、協会として種々学術的演説や集会を希望しても、従来は安価で便利な家がなくて困りました。が今度それが出来れば誠に好都合です。夫婦者は独身者とは多少事情もちがひ又資力も豊ですから、当分独身者のみを入れる事になるだらうと思ひます。」①

こうしたアメリカン・スクールの建設以外に、善後会による在日外国人支援としてはインド人留学生への補助金支給が記録される。明治三六年渋沢はインドとの交流・親善のため、大隈重信とともに日印協会を設立した。大地震の前年飛鳥山において同協会の総会が開かれ、彼が第三代会頭として推挙される。横浜に留学する七十余名が罹災して、うち二七名が死亡し、三五名が神戸へ避難した。渋沢による資金補助願と善後会会長徳川家達の救済承認書を転写する。

① 『時事新報』大正一三年七月二四日。『渋沢栄一伝記資料』第四十巻、三一九～三二一頁。

罹災印度人救済資金補助願（渋沢栄一）

一金参万円也

内訳

一金参百六拾円也　学生学資補助金壱名壱ケ年分（一ケ月金三十円ノ割）

一金壱万八千円也　宿舎兼事務所（百弐十坪ニテ三十四名収容、坪金百五十円ノ割）

一金四千弐百円也　雑作費（互斯・水道・電灯取付費用ヲ含ミ、坪金三十五円ノ割）

一金参千壱百円也　電話一　卓上電話三

一金参千九百四拾円也　什器費

一金四百円也　見舞金（在東京罹災者弐名分）

以上

右金額ハ本会ニ於テ一切責任ヲ負ヒ指定ノ目的ニ使用可致候間、何卒格別ノ御詮議ヲ以て御交附被成下度、別紙理由書相添へ此段御願候也

大正十三年二月廿二日

日印協会会頭　子爵　渋沢栄一

大震災善後会長　公爵　徳川家達殿

［理由書］大震災ノ為メ在横浜印度人約七十名ノ内死亡セルモノ二十八名、帰国セルモノ数名ニテ残三十

五名ハ悉ク神戸ニ避難セリ、此内壱名ハ東京高工学生ニテ震災前ノ如ク働テ学資金ノ不足ヲ補フ能ハザル故本会ハ之ヲ援助シツヽアリ、又貿易業ニ従事セシ三十四名ノモノハ再ビ横浜ニテ業務ニ復センコトヲ切望シ居ルモ、復興容易ナラズ困憊ノ状黙視スルニ忍ビザルヲ以テ、本会ハ国際的ニ人道ノ大義ヲ完フシ且ツ他日日印貿易復興ノ基礎タラシメンガ為メ、先ヅ彼等ニ宿舎兼事務所ヲ与ヘント欲シ、別紙願書ノ通リ計画ヲ立テ、同建物ノ敷地ハ目下横浜市及神奈川県ニ交渉ヲ進メツヽアリ、猶ホ此外東京印度人中ノ罹災者弐名ニ対シテモ見舞金ヲ贈呈シ、此機会ニ於テ日印親善ノ実ヲ挙ゲン事ヲ期ス、貴会幸ニ本会ノ微意ノアル所ヲ察シ、特別ニ御援助ヲ与ヘラレン事ヲ懇願ス。

罹災印度人救済資金承認（徳川家達）

日印協会々長　子爵　渋沢栄一殿

大正十三年二月二十九日　大震災善後会々長　公爵　徳川家達　印

拝啓、陳者予テ御請願ニ係ル仕会事業資金補助ノ件聴届ケ、横浜市ニ於ケル罹災印度人ノ宿舎及事務所建設事業ニ対シ金壱万円也ヲ交付スルコトニ決定致候、就テハ左記ノ件々御諒承ノ上速ニ震災救護ノ実績ヲ挙ケラレ候様致度此段申進候也

記

一、前記金額ハ該事業ノ建築、設備費ニ充当セラレ度　但現金ハ其工事着手ノ報告ヲ以テ交付可致

一、事業実施ノ状況ハ随時視察スルコトアルヘシ

一、事業実施後ハ詳細ナル御報告ヲ得度　　以上　①

東洋人で初めてノーベル賞に輝いたインドの詩人タゴールは、関東大震災の翌年六月再び日本を訪れた。日印協会の会頭として渋沢は、日本女子大学での講演など付添い、飛鳥山の曖依村荘において歓迎の茶話会を催した。②　こうした講演や会合に際してタゴールは震災に抗する民族に理解と敬意を表するとともに、拡大する諸国の排日運動と日本の対外侵略に憂慮を示したとされる。貴重な史料として渋沢の回顧と両者の往復書簡をここに掲げる。

渋沢栄一「予とタゴール翁」

タゴール翁とは八年前に来られた時、日本女子大学校長成瀬仁蔵氏の紹介で始めて会つた、其時翁は横浜の原富太郎氏の三渓園に滞在して居られたので、成瀬氏と共に御訪ねして御飯を一緒に喰べ、通訳によつて談話を交へたのであつた

この前年の縁故もあり、再度の渡日に骨を折つたり歓迎奔走して居る、高楠順次郎博士・姉崎正治博士・山田三良博士や、従来印度と関係の深い人々などから相談もあつたから、滞在中は便宜に旅行させ度いと思

ひ、一日私の家も訪問して貰ひ、茶話会を開き度いと思つて、少しは力添へもし、本年六月十二日には、茶話会を開いたやうな訳である。

滞在は僅かに十日から十三日までの四日間であつたが、此の間四・五回会見したから八年前よりは親しく話し会ふことも出来た、その人となりは仙人とも云ふべく、その風采態度も高尚で脱俗的であつた、風采態度ばかりでなく人格も脱俗的で気高く、思想も高遠の人と云つてよい、況んや詩人であると云ふことである。。

詩と云へば、私も漢詩はやるし、人の詩も理解する丈の力を有つ居る積りであるが、西洋の詩は判らぬ、併しは翁は話が上手であり、云ふことに余韻があつたから、詩人であると云ふことはさう云ふ所からも窺はれた、かう云う人と交はりを結んで居れば益を受けることが多いと思つた。

翁は、着京早々十日の晩日本女子大学に来られ、日本の女子に対する教育の必要を説き、社会の進歩につれ益々その必要あることを訓戒的に説かれた、尤もな説のやうに思つた。

十一日には日本工業倶楽部に於て一場の講演をやつたが、意義ある内容であつたが為に、千二・三百の聴講者が皆しとやかに謹聴し、少しも喧騒の様を見なかつた、その梗概は、日本の昨年は震火災に遭遇し、今年は又人為上の或関係に於て悩まされて居る、即ち昨年は自然が意外なる惨状を日本に加へたが為めに、日本人は非常なる災害に苦しんだ、併し日本人が今や復興に努力して止まぬ意義のあるのは頼もしい、この災害は自然であるから之れを防ぐことは出来ないが、今年のものは人為の被害であつた。日本人は内心之れを憤慨して居ると想像するけれども、外部は至つて温健・質実であるのが頼母しい、之れを憤激して道理を外れるやうな過激に過ぎてはならぬ。国際的には知識と力を以て進み、事実に於ては暴戾圧迫を事として居るものがある、個人間に於ては温情的であるけれども、国際間になれば少しも仮借することなく、人の迷惑す

① 日印協会参考書類『渋沢栄一伝記資料』第三六巻、五三ー五四頁。
② 招客書類（二）『渋沢栄一伝記資料』第三八巻、六〇五ー六〇六頁。

ることを何とも思はぬものがある、強者が勝手に弱者をいじめたならば平和は保つことが出来ないではないか。右のやうなことを各方面から説き、之れを改めるには、政治を道徳化さなければならぬと云ふ風に解決したやうであつた。その趣旨もよし、言葉が豊富で、言葉の使ひ方も上手であり、雄弁家と云ふよりも、壮重な演説であつたと云ふことが出来る、日本の時事を論じ、欧米殊に強者・智者の横暴を除かなければならぬなど要領得たものであつた。

十二日は茶話会であつたから緩くり話し合ふ積りで居たが、日本の音楽を聴き度ひと云ふので、琴・三味線・尺八を聴かせることにして二時間ばかり早く来て貰つた、此の時は多勢の人を呼ばずに少しばかり思想界の人に来て貰つた。其の時私はこう云ふ質問を出した、それは人人の進歩を図る為めには、洋の東西を問はず、古今を論ぜず知識を進めることに努力して居る、知識の進歩は科学の進歩となり、船が出来、電気が出来、肥料が出来、そして富と力になるが、富と力を得れば相争ふやうになる、さうすれば結局知識の向上は、個人の富と力とになれば大なる罪悪を作るのが知識であるとされるのが通例である、さうなれば知識を学校で勧めることは罪悪を勧めて居るやうなものである、之に対する方策はどうであるかと云ふのであつた。

すると翁は、知識が富となるのは悪くないが、力となると悪くなるからいけない、富は決して自己単独で出来るものではないから、凡てを潤すやうにしなければならぬ、世の中には知識によりて富を作り、富によりて罪悪を犯すものがある、このやうな知識を有つて居るのがいけないのである、例へば富が邸宅を作つたとすると、それが平均するやうでなければならぬと答へられた。

第二に私は人種問題について質問した、十二・三年前、孫逸仙氏が来られた時、氏は東洋人種は白皙人種に拮抗するやうに奮励努力せねばならぬと云うて、有色人種と無色人種とを相競はしむるが如き思想を説い

た、併し私は人種を色別にして奮励させるのがよくないと思つて、日光は決して植物によつて区別はして居ない、大根の白い花も菜種の黄い花も日光は同じく照して居る、神と云ふものも、植物や動物の色によつて好悪があるべきではない、春は花は色が違つて同じく春を飾つて居るではないか、故に色によつて相闘はしめることはいけない、先方でも此方でも、さう云ふ事は止めたがよいと話したことがある、孫氏はどう云ふ考へになつて居るか知らぬが、私は今も同様に考へて居る、これはどうかと云ふと、翁は之には論がないと云つて同意された。

更に教育問題、国際問題について問はんとしたが、音楽の時間が来たのでよした、教育の問題については、ベンガル語で書いたものがあるから英語に訳して贈ると云ふ約束をした。翌晩演伎座に行つて芝居を見たので話をする暇もなかつた、十三日には板橋の養育院を暫時でもよいから見て貰ひ度いと云ふと、来て呉れたが、貧民の施設を斯くまでやつて居るのは感心たと称めて呉れたお世辞もあつたかも知れぬ、斯くの如き有様で別れたが、要するに変つた詩人であると思つた、印度の土地があのやうであつて、境遇や環境が進歩的でなく、自ら進歩向上しようとしても六ケしい為めでもあらうが、翁は理想的に傾いて活動的でもなく、進歩的な所が乏しくはないかと思はれた。①

① 渋沢栄一「予とタゴール翁」『東京市養育院月報』第二八一号（大正一三年一二月）一―四頁。『渋沢栄一伝記資料』第三八巻、六〇六―六〇八頁。

渋沢栄一　ラビンドラナート・タゴール宛大正一三年六月一七日付書翰控

大正十三年六月十七日

渋沢栄一

ラビンドラナス・タゴール様

拝啓、貴下の東京御滞在は極めて短日時に候しも、諸種の機会に於て御目に懸るを得たるは老生の欣快措く能はざる処に御座候、貴下の試みられたる講演及座談は、人生の根本義に触れ極めて高尚なるものに候、道徳の理想に生き精神的生活を渇仰する人にとりては、貴下の御来遊は最も印象深きものに御座候

老生を始め養育院の吏員は貴下の御来訪を永く記念し、此事業に対する御親切なる御言葉をも忘る間敷候

老生は教育及将来の平和に関する御意見を、拝聴致すべき時間無かりし事は深く遺憾とする処に御座候、乍併教育問題に就てはベンガル語の御著述を英訳せしめられ御送附可被下由にて、御厚志有難拝読の機会を深く期待罷在候

拙宅に御来訪の節、撮影致候活動写真映画一巻、桜井義肇氏に托し贈呈仕候間、記念の御土産として御受納被下候はゞ本懐に存候

終に臨み再会を期待し、尚ほ無事御帰国被遊候様祈上候　敬具

（右英文書翰ハ同日付発送セラレタリ）

ラビンドラナート・タゴール　渋沢栄一宛一九二四年六月二一日付書翰

（六月廿七日入手　渋沢邦訳）

一九二四年六月廿一日

ラビンドラナス・タゴール

渋沢子爵閣下

拝啓、活動写真の映画を御送り被下真に難有奉存候、右により非常に愉快なりし会見を永久に記念するを得べしと存候

小生の英文講演集出来次第一部送呈仕度と存居候、猶ほ東洋文化の中心に関して懐抱する吾人の理想に関し、閣下が多大の興味を抱かれ候事誠に難有、将来永年此件に就て十分なる御協力を御願申上度と存候猶ほ今日の確乎たる友誼に就ても宜敷御願申上度と存候

敬具　①

① 渋沢栄一「書簡控」およびラビンドラナート・タゴール「書簡」『渋沢栄一伝記資料』第三八巻、六〇九―六一〇頁。